

相国寺史編纂委員会編
原田正俊・伊藤真昭監修

『相国寺史』第一卷 史料編中世一

法藏館 二〇一九・三刊

A5 九二六頁 九〇〇〇円

臨済宗相国寺派大本山相国寺（京都府上京区）は永徳二年（一二八二）に足利義満によって創建された、室町期を代表する五山寺院である。本書はその相国寺初の本格的な寺史の第一弾で、寺の勧請開山である夢窓疎石が誕生した建治元年（一二七五）から文正元年（一二六六）一二月までの相国寺関係史料を編年的にまとめている。

実は現在の相国寺には中世の古文書がほとんど伝来していない。これは度重なる火災などで失われたことが原因と考えられている。そのため、これまで後世の史料を用いて中世相国寺像が描かれてきた。たとえば一九八四年から刊行された『相国寺史料』（藤岡大拙・秋宗康子校訂、思文閣出版）のうち、中世にあたる第一巻は『相国考記』などの編纂史料を用いており、全一卷の大部分は近世以降の史料集成となつて

いる。

だが近年に入り、こうした状況に変化が生まれてきた。公武統一政権研究や中世後期仏教研究の中で、相国寺の創建や足利将軍家の追善仏事、相国寺大塔供養などは室町幕府による宗教政策の一つとして注目されてきたのである（たとえば早島大祐『室町幕府論』講談社、一二〇一〇年など）。また『蔭涼軒日録』や住持名簿などを用いることで、室町期相国寺の歴代住持や塔頭院主の基礎的データが作成されている（中井裕子『室町時代の相国寺住持と塔頭－蔭涼軒日録を中心とした』相国寺教化活動委員会、一二〇一三年）。

とはいえこれらのこと以外に、たとえば相国寺は五山文学など禅文化の中心地としての側面もあり、いまだ室町期相国寺の全体像は明らかになっていない。そうした意味で本書の刊行の意義は極めて大きいといわねばならない。本書では相国寺だけでなく鹿苑寺や慈照寺を含む塔頭寺院の新史料、僧伝史料を含む五山文学作品、同時代の相国寺以外の古文書や古記録など多様な史料を集積している。

さらに特徴的なこととして、必ずしも相

国寺が直接登場しない史料も積極的に取り上げている点が挙げられる。たとえば応永年間の史料には足利義満が北山第で自らの息災などを祈らせた北山第祈禱の記事が散見されるが、これは主に顯密僧や陰陽師が行つたもので、禪宗は直接的には関係しない。だが後に金閣と呼ばれる舍利殿が造営され、応永一年（一二〇四）には焼失した相国寺大塔が再建されるなど、北山第は同時期の禪顯密全体における重要な空間であった。また相国寺僧が荘主を勤めた東寺領矢野荘に關する史料なども取り上げられ、全体として相国寺を軸に、同時期の政治・宗教・社会における横断的な関係を眺める構成となっている。

本書は相国寺の僧の活動・法会・幕府との関係・伽藍の変遷・政治活動・経済（莊園・金融活動）・外交・文化と内容が多岐にわたっている。今後本書が相国寺の歴史にとどまらず、室町期の政治史や禪宗史、建築史、対外関係史など多くの研究に利用されることを期待したい。

（山口啄実）